

くろっけ

平成六年七月二十七日(第二種郵便物認可)
平成十八年十月一日発行(毎月一回一日発行)
第十二巻第八号(通巻第百五十号)

鈴



くろっけ

創刊百五十号記念

俳句雑誌

GLOCKE

第150号

10. 2006

百五十号を迎えて

品川鈴子

海のものとも山のものとも知れぬ「ぐるっけ」を心を尽くして育んだ百五十号、それはひたすら俳諧にかしずいた歳月でした。

皆様のお力添えを得て、航路もようやく安定しましたので、これからは創作にも一層の時をかけたいものです。

ぐるっけ船が二〇〇号、三〇〇号へと寄港しつつ進んでいくには、会員の方々の俳句への想いが追い風となってくれることでしょう。

そこで、百五十号に因んで類例のない試みとして連句「百五十韻」を巻き上げました。これは「百韻」の一・五倍、百五十名が連衆となつて知恵を寄せ助け合つて連句の楽しさを味わいました。連句が初めての体験という方も多く、作品としては満点とは言えませんが、私の一直した箇所などを参考にして親しんで頂ければなによりです。

化粧直し

品川 鈴子

鯨^{はせ}釣りの当り出船の横波に

鯨が竿引く出船へと手を振れば

秋航船化粧直しの白ペンキ

突堤の鯨釣人へ銅鑼ひびく



秋日傘デッキチエアーのまどろみに
デッキチエアー間合広くて鱗雲
保育所の目かくしとなり竹の春
糸菊の先ことごとく玉結び
片割れの栗を靈りょうぐ供とする婚日
仏壇の学位記へ湯気零余子飯



玉 鈴

東京 安田とし子

安達太良の機嫌宜しき青田風
万緑に吸ひこまれゆくレトロ・バス
晩翠の碑詠めば城趾の月涼し
踏み入りて悔いのいささか草茂る
父祖の墓移すと決めし帰省かな

愛媛 梁瀬照恵

噴井の辺小銭供へて水貰ふ
立ち退きの廃屋浸す梅雨出水
睡魔おさへ持て成す亭主宵祭
打撲の身に膏葉沁みる熱帯夜
廃坑の穴の冷氣に一服す

兵庫 山口庸子

父在りて疎まれがちに茄子ふとる
餌を食べる緋鯉の頭口となる
田植機のフル回転す日曜日
時鳥昏き堂にて椅子坐禅

吟

神奈川県 山崎辰見

石地蔵足こそばゆき蟻の列
放流の四万十にすぐ馴染む鮎
碧眼の客迎ふるに豆ご飯
相よきを粒揃へして豆ご飯
蓮見船やさしき雨に舷濡るる

香川 合川月林子

富山より朱夏の葉を背負ひ来る
無人駅出れば真向ひ夏の家
電工夫空の高さで虹を見る
兄弟の酒量ことにす冷奴
浜屋顔砂のくづるる音を聞く

大阪 赤木真理

戒名に清と慈の文字月涼し
住職は母と同級桐の花
父と母夢で逢ひたる星祭り
しやぼん草残る恋文決して見ず
恋とか愛それ以上にて鉄線花

兵庫 秋田直己

燧道を抜け青芝のゴルフ場
はて誰か同窓会のサングラス
園児背に「祭」法被の揃ひなる
客を待つ熱砂にラクダ四肢曲げて
書留便留守居の昼寝起さるる

愛媛 足利 鋤子

狙はれし水鉄砲に双手挙げ
原発の排水口に寄る海月
硯海の乾きも早し雲の峰
とび職の地下足袋きまり梅雨晴間
梅雨の朝町内放送葬を告ぐ

愛媛 足利 徹

転がして猫の遊べり竹夫人
慎みの限度どこまで水着ショー
勝ち負けは観客次第緑将棋
用のなき店に夕立すぎるまで

大阪 尼寄太一郎

ロイド眼鏡知らぬ世代に誓子の忌
姉逝きぬ今宵は消さじ春灯
老楽のレッスンのどかフラダンス
町会の班長会議花の庭
春の昼こいさん欠伸噛み殺す

兵庫 荒木 治代

時の日を何をしてもなく虚ろ
梅雨の店昼を灯して荷の仕分け
雨雲の重き旅立ち蝸牛
食品階つまむ試食のメロン片
足組みて女優気取りのサングラス

大阪 池田かよ

PLの鉄塔白き梅雨晴れ間
長梅雨のよしなし草の名は知らず
梅雨雲の切れ目たのもし夕明り
梅雨冷えに摩りてだます痛き膝
荒梅雨の列島削る土石流

薬草歳時記

(二四九) イネ(稻)

八木 紀子

堪へがたし稲穂しづまるゆふぐれば 山口 誓子

田んぼに雀が集まり始めると米の乳熟期です。柔らかい米を潰すと栄養豊かな白い汁が出ます。さて日本では何故、れた気候と地形。昔、梅雨のない地方では高山が見える場に田ありで山は水瓶(残雪)を持ち、残雪の雪形を見て田植え時を決めた。山の名も雪形で白馬や蝶ヶ岳等。田の増加に従い人口が約、縄文時代27万、弥生時代60万、奈良時代60〜70万と増加し、祭りや諸々の農耕文化が発達し米が人の命を繋いだ。②稲の茎や根に大きな細胞間隙があり、水中で呼吸し陸に比べ雑草や病虫害の外敵も少ない上成長が速い。洪水で冠水した浮稲は呼吸困難で一日10cm節間を伸ばし、草丈5〜6mに及ぶ。③花は夏の朝開花し、昼に閉じる風媒花だが、ほとんどは開花直前に自家受粉し純粋種が無駄なく結実し刈り時が同じ。④100年以上同じ田で連作可能。田の水は毎年変わり栄養を含む自然水。⑤干し

飯から始まり長期保存可能でおいしい食糧等が考えられます。

別名や方言に稲・伊奈・穀・田の実・富草・年・秋待草・水影草。生薬品を米澱粉・粳米(うるち米)。稲の果実(玄米)や胚乳(白米・米澱粉)は滋養強壮、健胃、止渴薬で漢方に配合。胚果皮はビタミンB₁を含む糠でヌカ油にも。大腸癌抑制、抗酸化、抗菌、抗ウィルス、昆虫成育阻害作用が認められ保湿度も高い。重湯や粥は乳児食や下痢、腹痛、食欲不振な病人の昔も今も有難い滋養食です。水で膨らんだ粒を食べる御飯は腹持ち良く体に脂肪をためる為のホルモン分泌が緩やかで、パン等の澱粉に比べ太りにくいです。今や植物(砂糖黍、玉蜀黍他)が原料のバイオエタノール燃料が自動車用ガソリンに使用される御時世。100年いや50年先には人口減少、食生活の変化、バイオテクノロジーの更なる進歩で食作物も変わるかも…。「おーいめし」「ごはんよー」と父さん母さんの声こだまする水田広がる美し国、日本列島の姿はいかに。

漢方薬 白虎湯・附子粳米湯・竹葉石膏湯

参考文献 「日本薬草全書」新日本法規

「植物の事典」東京堂出版

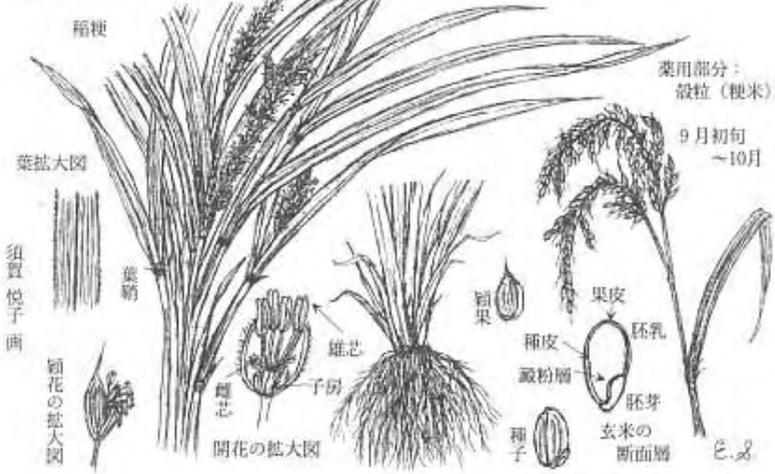
「植物生理学」培風館

「米なんでもブック」米穀交授給糧課協議

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

イネ [イネ属] (いね科)
Oryza sativa L.

稲の花：穂状花序 8月中旬



稻雀茶の木ばたけやにげどころ

松尾 芭蕉

泣て来て子も飯喰ふや稲の中

中川 乙由

早稲の香や聖とめたる長がもと

与謝 蕪村

稲刈の母目をつぶり乳をやる

高野 素十

稲の香におせぶ仏の野に立てり

水原秋櫻子

耶馬溪の岩に干しある晩稲かな

杉田 久女

落穂拾ふ顔を地に伏せ手を垂れて

西東 三鬼

我思ふ如く人行く稲田かな

中村 汀女

徳利の口まつくらや稲穂波

桂 信子

稲熟れていよよ豊郷らしくなる

塩出 眞一

ぐらつげ

鈴の奏

品川鈴子選

大瀑布あらゆる音を吸い込みぬ
愛媛 福島 松子

ががんぼや茶室の隅に漂える
いつもの事いつも通りに梅を干す

手際良く家事をこなして水中花

家移りにビール注ぎ合う義兄弟
香川 大空 純子

冷房の新居を婿に案内され

願い事無くて七夕夫と酌む

換気扇油污れの重き梅雨
兵庫 山之井みよ子

蛇を見てより厨事手につかず

冷蔵庫開け閉め七度点眼す

父の日にもらいし分を子に包む

花菖蒲各部屋に活け誕生日

山門をさつと抜けゆく黒揚羽
兵庫 四葉 允子

鉄筋のハイカラ本堂風涼し

土間涼し沓脱石の高きこと

百合の香に部屋はんなりと老一人

今日少し芭蕉の巻葉とき始む
大阪 古林田鶴子

梅雨じめり脚の補装具きしむ音

五月闇ケア・ホームに童唄

ばつさりと髪切ってみる半夏生

夫の香の枕をすけし螢の夜
愛媛 岡部三和江

父の日や妻には見せぬ別の顔

日の盛り取り込むシート音たてて

看護師のただのひと言稲光り
兵庫 唐鎌光太郎

信号を待つ間も探す片かげり

門涼み下校途中の同級生

逸る子を待たせかぶせる夏帽子

水遊び綱引かれても止めぬ犬

宵涼し幼子を追ふ下駄の音
兵庫 西田 敏之

石畳崩るる古道梅雨深し

ゆるゆると大扇風機古書の店

よぢ登る樋の朝顔こぼれ種子

弓を持つ少女のうなじ汗ひかり
兵庫 松村紀久男

少年の日の掻き氷頭もしびれ

秀 鈴 記

巻頭三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 瀬口ゆみ子 //

*選句は全て 品川 鈴子

大爆布あらゆる音を吸い込みぬ

福島 松子

世界三大爆布、ナイアガラ・イグアス・ビクトリアを私も観ましたが、その水勢と轟音は想像を絶する激しさでした。会話や囁り咆吼は勿論、あらゆる物音・飛行機やヘリコプターの爆音も耳に届かず、聴力の限界を超えていて聴き分ける要もない。世の音を掻き消して極まる爆布は、かえって地球の子守唄のような安らぎと、不思議な静寂感さえ感じさせる。

家移りにビール注ぎ合う義兄弟

大空 純子

若夫婦の新居へ引越しが無事完了。義兄弟も手伝いに集まり、皆ほっと一息ついて、まずはビールで乾杯。今では一番親しく助け合う仲だが、思えば婚姻の縁で繋がるまでは、お互いに他人同上。微妙な気遣いといったわりがビールのようなほろ苦い妙味、かえって良い付き合いが続く所以かもしれない。

蛇を見てより厨事手につかず

山之井みよ子

専業主婦が庭の敷地内でふと目にした蛇。我が家の主は自分ら夫婦と思いついで入んで久しいが、いつの間にか邸に潜んでいた蛇も家を守る主と思っているらしい。初めて見た姿が目にはちらつき、すこし薄気味が悪くて何となく落ち着かない。厨仕事のベテランも何時に無く渉らないのはその所為だろう。

土間涼し沓脱石の高きこと

四葉 允子

古民家の土間であろうか。薄暗い土間の広がりどひんやりした感触を思わせる。清められた空間に置かれた上がり口の沓脱石、実用向きと言えないその高さに着目したところが独特である。土間の涼しさと石の質感がよく合っている。

一の折

仲春 補聴器に紙のささやき萬愚節

品川 鈴子

晩春 ほどよき風にゆれる藤房

荒木 治代

三春 蛤は古人の願ひにて

堀井乃武子

響めつ面は履き慣れぬ靴

後藤 洋子

ひよつとこをやんやとはやす赤提灯

村田とくみ

大風呂敷をまたも広げて

大西芙美子

消息を遠くに聞きて月の人

唐鎌光太郎

三秋 静かに出入り啄木の穴

松村紀久男

晩秋 植木職真似てこはごは剪定し

伊勢 正

弾む心でヨーヨーマ待つ

井上 郁子

刻忘れ抱かれて見る碧き海

井上加世子

恋 揃ひの湯呑み共白髪まで

片山八重子

恋 恋占ひ吉で終ればすべて良し

木原 今女

小犬二匹を前籠にのせ

小阪 律子

打ち放すゴルフリンクは大曲り

白木原 敏

三夏 つもる話に鮎の会席

竹内 千春

三夏月 阪神の負けて益々暑き月

佐方 敏明

二の折

長き物には巻かるるが勝ち

高橋 大三

麗人も醜女も同じ女とて

山日 庸子

吉野川には数多釣人

正木 泰子

花吹雪両手広げて受ける子ら

中尾 廣美

春の運河にゴンドラを漕ぎ

中川美代子

俊寛忌目覚めを誘ふ鼓の音

改正 節夫

いぶかるやうに鶏が足止め

北中みやこ

二面石いづれが吾か見比べて

川合まさお

欲しくて脱がすマネキンの服

的場うめ子

物言はず別れしことを詩に詠みて

内藤 三男

恋 春夫の胸に千代が棲みつ

吉本 淳

恋 釣鐘を焰に包む深情け

増田 和子

チェルノブイリの惨禍いつまで

栗田 武三

戸締りが気になり戻る月明り

市橋 香

猿の腰掛まめに記録し

猿橋二三雄

三秋 D51の休む姿が身に沁みて

三枝 邦光

物忘れたり取り落したり

岡本 富子

三春

たんぼの紫は次々飛びゆきて

大井 邦子

壁の疵隠しおほせぬ文化庁

細野 恵久

卑弥呼の里のガイドふくよか

岡本 幸枝

仲冬

御用納めのあとは自棄酒

松本 恒司

柴犬も海峡越えて転動し

奥田 妙子

極光の下に雪原果てしなく

西田 敏之

きちんと正座してお経聞き

嘉悦 洋子

晩冬

成層圏にモーツァルト聴き

国永 靖子

三秋月

点滴のしづくに映る窓の月

小阪 律子

験もよし到着先は雨らしく

中村 碧泉

晩秋

焼きたて秋刀魚デパートで買ひ

小林 玲子

双ぶ礁にしぶく白波

山之井みよ子

晩秋

今年酒五臓六腑といふことば

武田とも子

恋

密会に互ひの世界見つめ合ふ

長瀬 節子

恋

相手変はれど主は変はらず

谷 泰子

恋

ドラマのやうに熱き口づけ

先山 実子

恋

小走りに横丁曲る薄化粧

角谷美恵子

何様も己が運命わからずに

水上 貞子

恋

町行燈の明り頼りに

寺川おさむ

三夏月

酪駝に揺られ見上ぐ夏月

秋田 直己

恋

夢かなふ豪華客船ハネムーン

山際 みこ

三夏

チンドン屋おしやれのつもりサングラス

林 美智

京の着倒れダンスパーティー

小島 昭男

自室にこもり孫はパソコン

長谷川とし系

料亭の厨の生簞ほの暗く

武田ともこ

お隣のカレーの匂ひ庭にまで

勝野 薫

初夏

鎮守の杜に蝉のぬけがら

西尾 茂男

三春

温む水辺に何か居るらし

松井 洋子

三夏月

引越してまづベランダに月仰ぐ

北畠 明子

晩春花

花衣母の形見を染め替へて

合川月林子

ビデオカメラを回し続けて

早川 周三

三春

若駒跳ねる牧場広がり

三橋 早苗

豆剣士「おす」と挨拶声変り

竹内 方乃

晩春

鳶の巣立ちは一気呵成に

藤田かもめ

三の折

磯遊び消防艇も影ゆらぎ

河村 泰子

晩春花

花の雲キャディーの示す方向は

田邊 朔郎

晩春

磯遊び消防艇も影ゆらぎ

河村 泰子

晩春

オルゴール鳴る春塵のまま

高橋 由紀

三春

春嵐にも強度気になる

牛尾 曜子

四の折

三春

長閑さに巡査の欠伸続けざま

中田 寿子

ゆるりほんわかあがる湯煙り

森田 蓉子

裏長屋またも子宝生まるらん

角谷美恵子

「おい元氣か」と自転車を止め

村田 克彦

リハビリに堤の散歩疲れ果て

小原みどり

恋

いつも待ちあまる甘い求婚

田中千代子

恋

黒髪を解きて誰に委ねるや

野口喜久子

恋

非難覚悟の寝乱れの宿

大井 邦子

恋

元かれは伴侶といひて紹介し

岩田登美子

三秋月

楷の双樹に月の輝やき

河村 泰子

初秋

踊りの輪江州音頭朗々と

竹下 昭子

晩秋

利酒に酔ひ呂律あやしく

谷 泰子

分限町茶粥はふはふ吹きながら

岡本 幸枝

三冬

洗ひすぎては縮む股引

木村 美猫

盆栽に電飾灯し聖樹とす

古井 公代

テポドン狙ふ射程内とは

岩田登美子

世界中手塚アニメに親しみて

木村 美猫

全身映す鏡あちこち

古井 公代

恋

將軍のご落胤とや眉りりし

岩田登美子

流木をやうやく掴み波の上

古井 公代

郵便受けにとぐる巻く蛇

岩田登美子

月涼しカジノ帰りはすつてんてん木村

美猫

人の情けにちよつとすがりて

森 倭子

国寶に琴の演奏姉妹

木津左耶子

溢るるばかり百千鳥どち

三嶋八千穂

隠沼をかこめる花の爛漫と

内藤 廣

霞がかりの翠黛の山

須賀 悦子

三春

五の折

シーサーは団子鼻なり山笑ふ

谷 泰子

杖を頼りに六根清浄

野口喜久子

すかたんは上方言葉さわぎたて

森田 蓉子

夢物語喜望峰行き

小原みどり

蕎麦殻の枕持ち込む選手村

大倉 正也

鈴の菟集鳴らぬ土鈴も

藤田かもめ

枝折戸に門番めきて墓

弓場 赤松

嘘の涙に使ふハンカチ

高橋 照葉

病む妻へメロンひと匙含ませる

藏本 博美

波立つ珊瑚礁を飛べたら

陶山 泰子

モノリザの絵のすみずみに謎を秘め

細川 知子

子のいたづらをまたもわびをり

赤木 真理

第二希望の街に落ち着き

近藤 倫子

恋 買ひあさるにきび治しの化粧水

古井 公代

三春月

想ひ出は引出しの中月朧

辻 雅子

恋 忘れたき人忘れかねて

末野 孝

三春

蓬の香り残る掌

瀬口ゆみ子

恋 百年を開けずじまひの玉手箱

師岡 洋子

三春

鶯のホーがやうやく伸びやかに

塩出 眞一

結願とするふるさとの寺

平野泰一郎

あした待たるる湯女の背流し

武藤 土侑

初夏 額縁の歪み正して新茶汲み

史 あかり

末つ子の出勝を兄が突つつきて

石橋 萬里

三夏 羽蟻も出でて憂きことの増す

坂口三保子

セーラー服で山の分校

島 純子

復興の街にあふれるモダンジャズ

中村みち子

新任の先生を恋ひ逃避行

久下 眞一

脳をきたへる冊子よく売れ

藤井久仁子

恋

細き足首淡き紅刷き

尼寄太一郎

裾からげ走り出しさう竜馬像

明石 文子

三冬月

凍て月にシチューこと煮えてゐる

井上あき子

初秋 鷹の峙出とよの満を持しつ

山崎 辰見

三冬

着ぶくれのまま骨上げの箸

野口喜久子

初秋月 六本木ヒルズに昇る盆の月

北畠 明子

清涼殿松皮の屋根の乾きがち

馬越 幸子

三秋 里芋煮るもおばんざいふう

佐竹千寿子

改正なるか皇室典範

長谷川 鮎

三秋 鎌をとぐ澄みたる音の遠くまで

三輪 慶子

両の手を父母に預けて幼稚園

平川 倫子

晩秋 古希の祝は菊の節供に

中田 芳子

恋

無邪気な彼はひとまわり上

森田 子月

家事さばりゴルフにのめり込みし頃

市橋 章子

晩春花

吾が胸に棲む鬼騒ぐ桃の花

高橋 花子

晩春 同窓の和気あいあいと雛納め

岡田 章子

三春

春炬燵にて「墮落論」など

中島 節子

晩春 億万円なぞ端金とは

神田 のぶ

三春

紙風船の今は珍し

北畠 明子

六の折

晩春

右の窓左の窓もねぎぼうず

藏本 博美

晩春

花筏真鯉の鱗に曳かれつつ

岸 はじめ

晩春花

派手目に決めて春の装ひ

安田とし子